

巻 頭 言

加古川中央市民病院は2016年7月に開院し、本年で10周年を迎えます。10周年を迎えることができましたのも、当院を支えていただきました加古川市をはじめ兵庫県などの行政、神戸大学医学部、地域の医療機関や介護施設、そして何より地域住民の皆様のご理解とご協力のおかげと心より感謝申し上げます。



歴史も職場風土も全く異なる2病院の統合に始まり、診療機能の充実を図り市民病院としての役割を果たすべく職員一丸となって取り組んでまいりました。2020年の新型コロナウイルス感染症への対応では、重点医療機関として52床のコロナ病床に、妊婦160名、小児770名を含む3,400名の入院患者の受け入れを行うと同時に、救急診療や緊急手術を止めることなく実施してきました。新型コロナウイルス感染症の勢いも収まってきたところ、ウクライナでの紛争を皮切りに中東情勢をはじめ世界情勢は不安定となり、エネルギーや資源の供給が不透明となる中で、医療活動に欠かせない様々な物資の調達は厳しさを増し、現下の物価・人件費の高騰や労働人口の縮小といった課題を抱えている状況です。

この学術誌の歴史は、「加古川市民病院機構誌」として2012年より創刊され、加古川西市民病院、加古川東市民病院ならびに機構の1年間の業績や教育、研究の成果をまとめたものとして始まりました。翌年にはISSN (International Standard Serial Number, 国際標準逐次刊行物番号) を取得し、国立国会図書館の蔵書として広く開示され、より多くの人への情報発信が可能となりました。第4号からは、「加古川市民病院機構学術誌」と改称し、第6号は加古川中央市民病院として初めての学術誌となり、本刊で第15号になります。創刊号には、非常に多くの原著等が掲載され、その最初の論文は「医療被曝について」というタイトルで放射線技師が投稿しており「検査による患者の被ばく線量をできるだけ少なくすることが重要である」と結んでいます。その後、2019年に医療被ばく低減施設としての認定を受けており、質向上に取り組んだ足跡をうかがい知ることができました。また、加古川市民病院時代から毎年開催している「加古川市民病院機構学術研究会」は34回を数え、昨年度は17演題が発表されました。院内各部門からの特徴ある取り組みや研究が発表され、日常業務で忙しい中、論文として本学術誌にも投稿いただいています。この歴史ある学術誌ならびに学術研究会は、今後もしっかりと継続していきたいと思います。

加古川市民病院機構学術誌第15号からは電子ジャーナルとして発行することと致しました。2025年度の職員の論文をご覧いただき忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。最後に、本誌の取り纏めにご尽力頂いた編集委員や職員の方々に深謝申し上げます。

2026年10月

加古川市民病院機構
理事長 大西 祥男